CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by Tsukuba Repository

書評

天野正治 著
『シュプランガーの陶冶理想論』

新　井　保　幸※

１　シュプランガー研究史における本書の位置

本書は，天野正治氏（筑波大学名誉教授）が，東京教育大学助手時代に，同大学に提出した学位論文を，2010年に刊行したものである。周知の通りシュプランガー（Spranger, E., 1882－1963）は，20世紀のドイツで活躍した哲学者・教育学者で，その著作は第２次大戦前から日本の多くの学者（千葉命吉，篠原助市，辻幸三郎，小塚新一郎，篠原正瑛等）に注目され，紹介されてきた。戦後に限ってみても，わが国で刊行されたシュプランガー研究書は少なくない*。著者は，故石山脩平教授に師事してシュプランガー研究に入り（当時シュプランガーの最晩年），1965年に教育学博士の学位を取得した（そのとき，石山教授もシュプランガーも，すでに鬼籍に入っていた）。その後，著者は国立教育研究所（現国立教育政策研究所）に勤務するようになり，教育哲学の研究に専念することはできなくなったが，その代わりドイツ教育研究の第一人者としての地位を確立した。1986年に筑波大学教授に迎えられ，1999年に定年退官するまで，新設された比較・国際教育学研究室の礎を築いた。

---

* その主要なものを次に挙げる。
①村田　昇　『国家と教育――シュプランガー政治教育思想の研究――』ミネルヴァ書房，1969年
②　同　『シュプランガー教育学の研究』京都女子大学，1996年
③長井和雄　『シュプランガー研究』以文社，1973年
④田代尚弘　『シュプランガー教育思想の研究――シュプランガーとナチズムの問題――』風間書房，1995年
⑤山邊光宏　『シュプランガー教育学の宗教思想的研究』東信堂，2006年
⑥西村正登　『シュプランガーの教員養成論と教師教育の課題』風間書房，2008年
興味深いことに，上記の著者たちは，いずれも広島大学の出身者である。

※筑波大学大学院人間総合科学研究科

シュプランガー研究は，総論的な研究と各論的な研究に分けることができる。総論的研究というのは，シュプランガーについて広く紹介することを意図した入門的研究のことを言う。また各論的研究というのは，シュプランガー思想の全体ではなく，その一部分を取り扱った研究のことを言う。部分には，時期による限定（初期・中期・後期等）もあれば，思想内容による限定（政治思想・宗教思想・倫理思想等）もある。総論的研究は研究史の初期に見られることが多く，各論的研究は，総論的研究がある程度出尽くした後に出てくることが多い。たとえば，長井の研究は総論的研究である。時期を限定しているわけでもなければ，取り扱う思想内容を限定しているわけでもない。しかし，そうだからといって，総論的研究の価値が各論的研究よりも劣ると言いたいわけではない。長井の研究には今でも他の追随を許さないものがあると思う。それに対して，田代（ナチズムとの関係）や山邊（宗教思想）や西村（教師教育）の研究は各論的な研究である。村田の著書①は一見すると各論的研究（政治教育思想）のように見えるが，総論的研究の性格も持ち合わせている。

さて，シュプランガー研究史のなかに，本書はどう位置づけられるのだろうか。一見すると各論的研究のように見え（陶冶理想に限定），事実それに違いはないが，村田と同様，初期の研究に見られる総論的性格も併せ持っている。各論的研究のかたちをとりながら，シュプランガー教育思想の全体にも配慮した研究であると言える。初期の研究が広く浅くなりがちなのには理由がある。シュプランガーの教育思想が必ずしも一般に広く知られていない段階では，研究者たちはシュプランガーについて全般的に紹介しようとする強い動機を持つし，受け取り手の側にもそういうニーズがあるからである。「浅く」てもよいから「広く」が求められる。しかし，シュプランガーの思想が広く知られるようになると，彼の著作を一通り紹介するだけでは，研究としてのオリジナリティを主張できなくなる。先行研究を超えてオリジナリティを主張するためには，研究対象を絞り込み，そこを掘り下げる必要がある。田代や山邊らの研究は，シュプランガー研究がそういう段階に入ったことを示すものであろう。しかし例外もあって，村田の２冊目は１冊目よりも総論的性格をむしろ強めている。１冊目は意図的に政治教育思想に限定したため，２冊目ではシュプランガー教育思想の全体を扱いたいと意図したのだろう。

2　本書の構成と概要

本書の構成は，次に示す通りである。

序　論　本研究の意図と構造
第Ⅰ部　陶冶理想の類型学
　第１章　陶冶理想の類型学とは何か
　第２章　陶冶理想の類型学の展開
　第３章　現実における人格形成の過程
第Ⅱ部　陶冶理想の生態学
　第１章　陶冶理想の生態学とは何か
　第２章　陶冶理想の生態学の展開
第Ⅲ部　陶冶理想の歴史研究
　第１章　陶冶理想の歴史研究とは何か
　第２章　陶冶理想の歴史研究の展開
第Ⅳ部　陶冶理想の歴史哲学
　第１章　陶冶理想の歴史哲学とは何か
　第２章　陶冶理想の歴史哲学の展開
第Ⅴ部　陶冶理想の形而上学
　第１章　陶冶理想の形而上学とは何か
　第２章　陶冶理想の形而上学の展開
第Ⅵ部　陶冶理想論各論
　第１章　陶冶理想論各論の位置づけ
　第２章　基礎的陶冶，職業陶冶，一般陶冶
　第３章　大学と陶冶
　第４章　児童における固有世界の尊重
　第５章　政治教育論の展開

まず本書がこういう６部構成をとった論理をたどり，しかるのちに各部の概要を，なるべく著者自身の言葉を用いて，紹介しよう。

「陶冶理想の問題を，単に部分的にではなく，全体的，包括的，体系的に考察」することが「本論文の最も重要な意図」(10頁）である，と著者は言う。なぜ陶冶

理想（Bildungsideal）なのかと言えば，「陶冶理想の問題こそ，哲学的教育学の中心問題」(12頁）だからである。そうであるとして，ではどのように考察すれば「全体的，包括的，体系的」な考察になるのか。

「陶冶理想は……民族的生活，国民的生活それ自体の中から生まれてくるものであり，哲学が陶冶理想を導き出すことはできない」(12頁)。これが「シュプランガー陶冶理想論の大前提」である。ここに着目すれば，陶冶理想の研究とは，まずは過去の陶冶理想や他民族の陶冶理想を歴史的に研究したり，類型学的に研究したりすることである。対象が過去の陶冶理想なら歴史研究であり，現にある陶冶理想なら類型学的研究である。歴史研究や類型学は，シュプランガー自身が述べていることである。しかしそこに「生態学的研究」を加えたのは，著者独自の工夫である。

> ところで，私自身の見解として，シュプランガーの陶冶理想研究においては，彼自身が挙げている上記２分野〔歴史研究と類型学のこと――新井〕の他に，陶冶理想の生態学という分野が，純粋に学問的な陶冶理想の研究として考えられてよいと思うのである。私の言う陶冶理想の生態学とは，陶冶理想の生起，発展，消滅の過程を，精神史並びに社会史の考察によって明らかにしていこうとするものである。(12頁，下線部は引用者)

「こうして，**陶冶理想の歴史研究，陶冶理想の類型学，陶冶理想の生態学**の三つの側面におけるシュプランガーの所論を考察することが，シュプランガー陶冶理想論の研究にとってまず必要と考えられる」(13頁)。

しかし「シュプランガーの陶冶理想論は，上述の３分野〔歴史研究，類型学，生態学のこと――新井〕につきるものではない」。なぜなら，われわれは現実に生活しており，未来へ向かって決断を迫られているからである。その場合，われわれは「熟慮反省を働かせつつ未来に分け入っていくのであるが」，その熟慮反省は「単なる学問的反省」とは異なり，多分に「価値的意志と信念」を伴う。ここに「哲学的教育学に携わる者の，陶冶理想追究の独自の方向が存在する」。独自の方向は二つ考えられ，その一つは「民族の歴史に関する総括的な認識を所有し，それに基づいて，民族の実行的良心を鼓舞すること，すなわち，歴史哲学としての陶冶理想」の追究である。いま一つは「陶冶理想の形而上学的基礎の究明」であ

る。こうして「**陶冶理想の歴史哲学**と**陶冶理想の形而上学**という２分野が，国民生活の中から生まれた陶冶理想の純粋に学問的な研究の分野としてではなく，未来に責任を負った哲学的教育学者の，信念と熟慮とによって導き出される陶冶理想追究の分野として確定」(13頁）される。なお，陶冶理想の形而上学という名称について著者は「これもまた私自身がそのように名付けるものであって，シュプランガーがそのような明確な呼称を用いているわけではない」(200頁）と付言している。

「以上から，陶冶理想の問題への哲学的教育学のアプローチは，①陶冶理想の類型学，②陶冶理想の生態学，③陶冶理想の歴史研究，④陶冶理想の歴史哲学，⑤陶冶理想の形而上学，の５分野にわたって行われ」(13頁）る。さらに著者は最後に「**陶冶理想論各論**」を特に設けている。陶冶理想論の各論は，基本的には「上述の５分野のいずれかに属するもの」である。しかし「その重要性からして特に取り上げて考察することが望ましいと思われる個別的・具体的問題」(14頁）が取り上げられ論じられている。したがって，「５分野」に「各論」を加えたものが，著者の言う陶冶理想の「全体的，包括的，体系的」な考察であり，本書の第Ⅰ部から第Ⅵ部に対応している。

「第Ⅵ部　陶冶理想論各論」を除き，第Ⅰ部から第Ⅴ部まで，基本的には，第１章が「陶冶理想の○○とは何か」，第２章が「陶冶理想の○○の展開」，という規則的な構成を取っている。第１章の分量は比較的少なく（２～10頁），主要部である第２章への導入という位置づけになっている。

次に，各部での議論を要約してみよう。

第Ⅰ部　陶冶理想の類型学：シュプランガーの主著『生の形式』（1921）を「陶冶理想の類型学としての角度から考察」した研究は多数ある。しかしそれらは，前半の人間類型論に注目し，そこから個性的陶冶理想を導き出すものの，後半の倫理学的推論の部分にはあまり目を向けてこなかった。これに対し著者は「前半の精神科学的心理学と後半の倫理学が一体的に考察されて初めて全篇のモチーフが理解される」との立場から，シュプランガーの陶冶理想論が「個性の尊重と同時に，全体性の実現」を重視していることを強調している。

第Ⅱ部　陶冶理想の生態学：生態学の語は著者の創案であり，シュプランガー自身がその語を使っているわけではない。したがって，生態学に対応する原語は

ない。陶冶理想は例外なく生成・発展・衰微・消滅の過程をたどると見なすこと，言い換えれば，有機体モデルで陶冶理想の消長を説明しようとするのが，陶冶理想の生態学である。シュプランガーの用語で言えば，おそらく Morphologie がそれに近い。しかし，Morphologie は普通「形態学」と訳され，動的変容感が十分に出ていない。それで著者は，あえて生態学という語を採用したと見られる。

第Ⅲ部　陶冶理想の歴史研究：陶冶理想の歴史という表現から普通想像されるのは，古代・中世・近代といった時代ごとに出現した陶冶理想とその変遷の歴史であろう。現にシュプランガーにはその種の論考もある。しかしここで述べられているのは，そういった意味での歴史ではない。そうならなかったのは，それが「きわめて広範にわたる」ためである。それでは，その代わりに何が述べられているのか。ここで実際に述べられているのは，シュプランガー自身の陶冶理想論に強い影響を与えた二人の人物，すなわちペスタロッチとゲーテそれぞれの陶冶理想観である。

第Ⅳ部　陶冶理想の歴史哲学：陶冶理想の歴史哲学を言い換えて，著者は「歴史哲学的陶冶理想論」(136頁）とも言っている。陶冶理想の歴史哲学的基礎づけ，あるいは歴史哲学的に基礎づけられた陶冶理想という意味だろう。その意味は，陶冶理想は歴史意識と未来形成意志という二つの要素に支えられて成立するということである。陶冶理想の歴史哲学の要諦は，過去の陶冶理想を知り，形成さるべき未来の陶冶理想に思いを致し，その実現に向けて現在において決断を下すということであり，何でもありという意味での相対主義の克服である。現在という時点で，過去と未来を統一的に捉えることのできる陶冶理想の物語をつくること，と言ってもよいかもしれない。

第Ⅴ部　陶冶理想の形而上学：陶冶理想の形而上学は「シュプランガー陶冶理想論の核心」である。初期から後期まで，すべての時期を通じて彼の思想には「形而上学的性格が強く認められる」が，とりわけ第２次大戦後において「陶冶理想の形而上学的基礎の探究」に向かうようになり，「高次の自己の育成こそ，教育の究極目的」であると主張するに至った。

第Ⅵ部　陶冶理想論各論：最後に，シュプランガーの陶冶理想論を全体的，包括的に理解しようとする際に，無視することのできない個別的，具体的諸問題が，第２次大戦後の論著を中心として取り上げられている（職業陶冶論，高等教育論，児童観，政治教育論)。シュプランガーの職業陶冶論は第１次大戦後から有名であ

るが，この第Ⅵ部で使われている文献は主として第２次大戦後のもので，当時の最新資料だった。ドイツで『シュプランガー全集』が刊行され始めるのは1969年であり，著者の学位論文執筆当時はまだ出ていなかった。

3　批評

本書は，戦後のわが国のシュプランガー研究史における最初期の研究に属する。それでいて，シュプランガー陶冶理想論の体系的な研究として，本書を超えるものを私は知らない。それに加えて本書の論述は正確・明晰・緻密であり，意味が不明だったり曖昧だったりする箇所は，皆無とは言わないまでも，きわめて少ない。一言で言って，本書は今日なお読むに十分堪える作品である。

しかし，初期の研究であることからくる限界は，本書にもある。初期の研究の特徴の一つが，思想の時期区分に必ずしも自覚的でないことは，すでに述べた。今日であれば，初期・中期・後期という時期区分は外せない。それぞれの時期で彼の思想にはかなりの変化が認められるからである。本書でも時期区分が部分的に意識されてはいる（第Ⅳ部第２章）が，本書全体を一貫しているのではない。

本書は基本的に，シュプランガーの教育思想を――陶冶理想論に焦点化されているとは言え――体系的・包括的にまとめたものである。それを祖述という。しかし他者の思想をまずは忠実に知ろうと努め，いたずらに批判の対象としないのは，著者生来の人柄にも由る。著者はシュプランガーの思想を内在的に，つまり彼の立場に即して理解しようとしているのであり，批判することは意図していない。そのためにシュプランガーの言葉を丹念に引用し，主要な訳語には逐一原語が挿入されている。とは言え，本書は何分にもかなり昔に書かれたものだから，今日の時点で新たな知見と言えるものは少なく，その意味で新鮮さに欠けることは否めない。それを本書に求めるのは，ないものねだりになるであろう。

本書の論述は正確・明晰・緻密である，と言った。たしかに本書は明晰な表現で書かれている。しかし，正確な言葉できちんと書かれているということと，読み易いということとは，また別の話である。正確な言葉できちんと書かれているにもかかわらず，本書は必ずしも読み易くはない。それは必ずしも学術的な文章だからではない。感覚的な言い方を許してもらえれば，本書は読んでいていささか疲れる。なぜだろうか。本書は，シュプランガーの思想について著者が考え表現したことを，読者が読んで解釈する，という構造になっている。読者は，著者

を介して，シュプランガーの考えを知るのである。著者を介してシュプランガーの考えを知るわけだから，直接理解するよりも――著者がどんなにわかりやすく書いたとしても――困難を覚える場合がある。シュプランガーの思想を理解しようとするのなら，彼の著作を読むに若くはない。また，著者を介してシュプランガーの考えを知るということは，著者の考えとシュプランガーの考えとの関係を，読者が解釈するということである。その場合，両者の考えにちがいがあった方が，読者は両者の関係を理解しやすい。逆に，両者の考えに明瞭なちがいが見出せない場合，両者の関係は理解しにくい。著者はシュプランガーの思想を読者に正確に伝えようとするあまり，自分の解釈を前面に出すことを禁欲しているように思えなくもない。多少粗雑ではあっても，もっと積極的に著者自身の立場を表明してもよかったのではないか。つまり，本書からは，シュプランガーと著者の考えの違いがよくわからない。あるいは，シュプランガーの考えを，著者がどう思っているのかが，よくはわからない。内在的理解とは，自分を無にして対象を理解しようとすることではあるまい。自分の主張があるから，それと異なる他者の主張が理解できるという面がある。著者はシュプランガーの思想を著者なりの仕方で「個性的かつ全体的」に論じることはできなかっただろうか。もちろんこれは「言うは易く，行うは難」いことであり，自戒の意味を込めて言っているのである。

本書は，シュプランガーへの著者の尊敬と共感の念に根ざしている。同じ思いが，著者に導かれてシュプランガーを学んできた評者にもある。しかしその思いは，対象との距離を取りにくくする。私事にわたるが，評者が修士論文に取りかかろうとしていたはるか昔，恩師の大浦猛先生に諭されたことを想い出す。当時五十代半ばだった大浦先生はこう言われた。「君がシュプランガーを敬愛していることはわかる。しかし，研究というのは対象化することなのだ」と。いまならその意味がわかるが，当時の私には先生が注意してくださったことの意味が十分には理解できなかった。

研究成果に関して，一つ疑問を呈したい。著者は第Ⅱ部で「陶冶理想の生態学」を，第Ⅲ部で「陶冶理想の歴史研究」を，第Ⅳ部で「陶冶理想の歴史哲学」を，第Ⅴ部では「陶冶理想の形而上学」を，それぞれ論じている。「陶冶理想の生態学」は，陶冶理想が時間的・空間的に有限であることを指摘する。また「陶冶理想の歴史研究」や「陶冶理想の歴史哲学」は，陶冶理想が歴史的に制約されてい

ることを前提として成り立つであろう。それに対して「陶冶理想の形而上学」は歴史超越的な議論である。「高次の自己」は永遠の陶冶理想である，とシュプランガーは主張しているからである。

もし「高次の自己」という無時間的で状況超越的なものが，永遠の陶冶理想であるとすれば，「陶冶理想の生態学」「陶冶理想の歴史研究」や「陶冶理想の歴史哲学」にはいったいどんな意味があるのだろうか。そういった研究は無用ということになりはしないか。なぜなら，陶冶理想がどのように生成変化しようと，陶冶理想の歴史がどれほど豊かであろうと，そんなことには関わりなく，われわれがめざすべきなのは永遠の陶冶理想である「高次の自己」である，ということになるはずだからである。また，すべての陶冶理想が有限であるとすれば，「高次の自己」という陶冶理想も例外ではなく，「陶冶理想の生態学」が言うように消滅を免れず，いつか別の陶冶理想に取って代わられることになるはずである。一方においてシュプランガーはすべての陶冶理想の有限性と歴史的変遷を説き，他方においては，「高次の自己」が永遠の陶冶理想であると言う。この議論は矛盾していないだろうか。

この疑問にシュプランガー自身も答えていないし，著者もこういう疑問を持たなかったようである。この疑問に答えるのに，シュプランガー自身が挙げている「中核」と「外皮」の比喩が使える可能性がある。その論法は簡単に言えばこうなる。真の陶冶理想が「高次の自己」であるというのは「中核」である。どの陶冶理想も，その核心は「高次の自己」と表現できるのである。しかし「中核」においては同じ陶冶理想が，時代により，社会により，さまざまな「外皮」をまとって現象する，と。「中核」と「外皮」，あるいは主題と変奏。しかしシュプランガーも，著者も，そういう議論を十分に展開してはいない。

最後に，本書の由来を述べた箇所を引用する。

> ここに40年余りの歳月を経て読者の閲覧に供するのは，1965年に成立した筆者の学位論文であり，そこには未熟さを否定し得ないと同時に，若き日の自分自身の教育への思いが込められている。（はしがき）

40年余り前に書かれた学位論文を，著者はなぜ今になって公刊しようと思った

のだろうか。著者自身にとっては，本書は「若き日」の記念碑という価値を有する。しかし次のことを付言することも許されるであろう。著者の学位論文自体は「1965年に成立し」ていた。だから，時を置かずに公刊されていたならば，本書がわが国初の本格的シュプランガー研究として迎えられた可能性は，きわめて高かったと思われる。本学会として，その意味でも，本書が刊行されたことを慶びたい。

天野正治 著『シュプランガーの陶冶理想論』

玉川大学出版部，2010年，6,000円（税別）